

平成27年度第1回市史編さん委員会会議録〔要録〕

会議名称 平成27年度 第1回 市史編さん委員会
開催日 平成27年10月13日（火）午後1時30分～2時30分
会場 佐倉市役所議会棟1階会議室
出席者 市史編さん委員
浦田啓充委員長 近森正委員 堀越正行委員 五十嵐公一委員
中澤恵子委員 内田儀久委員 岩淵令治委員
事務局 須合文博行政管理課長 土佐博文副主幹 江森幹浩主査
記録作成 江森幹浩

会議内容

会議 『佐倉市史料叢書』の刊行資料（平成28年度）について

〔事務局〕

事務局より『佐倉市史料叢書 古今佐倉真佐子』の刊行につき提案

*配布資料 『佐倉市史料叢書 古今佐倉真佐子』の刊行について（事務局提案）に基づき説明

提案理由 1

佐倉市所蔵、佐倉市指定文化財である『古今佐倉真佐子』に関心を持つ市民が増えている。過去に4回、活字化されている史料だが、すべて絶版になっており、『佐倉市史料第二集 古今佐倉真砂子』の再版を希望する声が高くなっている。しかし、同書は読みやすさを重視するあまり原本記載を変えており、不正確な部分が多い。原本により忠実に正確な形で翻刻・刊行すべきと考えること。

提案理由 2

2年前より放送大学菅原ゼミ生（指導：菅原憲二 放送大学客員教授・千葉大学名誉教授）が『古今佐倉真佐子』の翻刻作業を行っている。菅原先生より、翻刻の成果を刊行につなげられればとの提案がある。ついては、翻刻の原稿を放送大学菅原ゼミよりご提供頂き、菅原氏に監修していただく形をとることで、歴史を学ぶ市民等の生涯学習の進展にも寄与できると考えられること。

なお、『古今佐倉真佐子』の付図、『佐倉御城府内之図』については、別に印刷を考えている。

体裁は、（案1）原典版－史料原本に基づき正確な翻刻をしたもの、（案2）市民向け版－史料に注釈などを加えたもの－一段組、（案3）市民向け版－同一二段組を案として提示する。

〔岩淵委員〕

昨今は史料集しか出さない自治体もある。史料集は非常に重要であり、この様に進めて頂くのはたいへんよろしいと思う。『古今佐倉真佐子』の提案理由を2つ挙げられているが、江戸時代の史料を出す場合、最近では「地誌」を最初に出す場合が多い。地元のかたに感心を持っていただけることもあり、『古今佐倉真佐子』を選んだのは適切と考える。『佐倉市史史料第二集 古今佐倉真佐子』は、改行や字の誤り、脱字等が見られる。より正確なものを出す必要があると思う。本来、翻刻作業は市史編さん室で進めていくのが通例であり、そのための予算も必要となるが、今回は翻刻を一からやる必要がなく、こちらの経費節減と、菅原先生の意味がマッチングしており、非常にありがたいと思う。菅原先生は、史料翻刻に非常に情熱を燃やされているかたであり、他に手がけているものも多く、菅原先生の指導ということで、精度の高いものが期待できる。なお、菅原ゼミの翻刻が完成ということではなく、佐倉市の責任としては、翻刻と原本を最終的に突き合わせる必要があり、その作業に必要な時間は十分に考慮する必要がある。この史料を選んだ理由については、賛同する。

〔近森委員〕

原典版はすでに完成しているのか。

〔事務局〕

7割から8割は読み進めて、菅原先生が照合作業をしているとのこと。

〔近森委員〕

時間的には余裕があり、来年度中には十分に間に合うという理解でよいか。

〔事務局〕

そのつもりで進めていく。

〔浦田委員長〕

原典版と市民向けの違いは何か。

〔事務局〕

市民向けは句読点があるのと、細かい訂正箇所の記載がない。原本には筆者による訂正があり、原典版では、この訂正前と訂正後を示すことになる。

〔中澤委員〕

原典版には、筆者が訂正を入れた印が行間にもある。市民向けの方は、かなや読点を入れて読みやすくするということかと思う。

〔浦田委員長〕

では、『古今佐倉真佐子』を刊行する方向で話を進めて行きたいと思う。

[近森委員]

その前に他にどのような史料があるのかを示して頂きたい。

[事務局]

前回の委員会で、近世、近代史料をいくつか例示してあり、その中から『古今佐倉真佐子』を選んだ次第である。

[近森委員]

他に地誌関係のものはあるか。

[事務局]

版本の『佐倉風土記』などがある。よく知られたものでは『古今佐倉真佐子』。江戸中期という史料の少ない時期のものであり、市民にとっても適当と考えている。

[内田委員]

公民館でも市民から『古今佐倉真佐子』を教材に取り上げて欲しいという要望は多い。親しみがあるのだと思う。

[浦田委員長]

次に刊行の形を決めていきたいと思う。

[岩淵委員]

内容的な確認であるが、市民向け版の案で提示されている「翻刻者注」というのは、どういったものか。

[事務局]

説明という意味の注ではなく、かなを漢字に直したものなどを指している。

[岩淵委員]

作業を増やすことになり大変だが、難読、難解な言葉に注を付けたりすることは、考えているか。

[事務局]

それは必要だと考えている。

[岩淵委員]

注をどの程度まで入れるかということを検討する必要がある。

[中澤委員]

原典版と市民版について、両方を出すという前提か。

[事務局]

それを含めて検討して頂きたい。

[中澤委員]

提案理由のどちらを重視するかということが大きい。正確なものを残す事が第一だと思う。有名な文書であり誤読が残ると未来に連鎖していく恐れがある。市民が求めているものを選択したのは大賛成だが、市民向けにものすごくていねいに説明する必要はあるのか。正確なものを残すという観点で、原典版に何かを加える様な折衷案を考えてはどうか。今後続く叢書の前例になるものと思われるし、市民向けとは言え、公民館名等での学習でも、元が正しいものがきちんとあればよいと考える。厳密には、読点があることで意味が変わる場合もあるので、本来の原典版であれば読点も付けないという考え方もあるが、そこは妥協して市民向けを配慮してはどうか。市民版が必要ではないというのではなく、合体させるような方策を探りたい。

[岩淵委員]

全く意見が一緒なのだが、市民版として提示されたものは、読点が入っていると修正部分を削ったというだけだと思うが、わかりやすいわけでもなく、原典版との大差はない。原典版に読点を入れてしまうと解釈が変わる場合もあるが、研究者は読点を消して読む事ができる。元の史料で修正してある部分などは残して、読点は打ってしまう、という折衷案であれば、研究者でも市民でも読むことが出来て、それぞれのニーズに応えることができると思う。折衷版を作れば二種類を出す必要はないと思う。

[近森委員]

青柳嘉忠氏が『佐倉市史史料第二集』に取り組んでいた記憶があり、その経緯を何らかの形で反映して頂きたいと思う。このように研究が重ねられてきた、ということが後から辿れることが、先人の努力の蓄積の中で新たなものが出るという意味を込められるのではないかと思う。

[岩淵委員]

『第二集』は意識までは行っていないが、市民向けをより進めた形になっている。文書は本来は改行してはいけないのだが、改行するなどの工夫により読みやすくなっており、そういった意識の下で作られている。そういう版もあって今日の位置づけになるという話を、解題に記してはどうか。この版に親しんだかたも多いと思うので、そこを踏まえた上で使って下さいということによいと思う。

〔浦田委員長〕

では、原典版をベースに、読点程度は入れる、という形で進めることとする。

〔岩淵委員〕

予算次第ではあるが、写真はどの程度を考えているか。

〔事務局〕

口絵程度を考えている。

〔岩淵委員〕

凡例に写真があると、市民にとっては親切ではないか。口絵にカラー写真を一枚入れることで、例えば朱書き部分などが理解できると思う。

また、市民を意識するのであれば、異体字、俗字、江戸時代の文書でしか使わない特殊な字について、予算があればしおりの様な形にすると、その都度、冒頭の凡例に戻る必要がなくなる。金銀銭の換算表、年代などをまとめるなど、そういった点でフォローしてあげて、本文は原典に忠実というのがよいのではないかと思う。

〔中澤委員〕

凡例の中で残す文字は、この史料に限ってのものと考えてよいか。近世と近代と共通するものもあるが、今後、この凡例を継承するということではないと考えてよいか。

〔事務局〕

史料によって違いがあるので、その都度、凡例を作ることになると思う。

〔近森委員〕

索引を作る予定はあるか。

〔事務局〕

あった方が便利だとは思う。検討する。

〔中澤委員〕

索引の項目としては、人名、地名。

〔内田委員〕

植物などもある。

〔近森委員〕

索引にするものの選択は難しいと思うが、いくつかあると嬉しい。

冒頭から読み進めて、目的の事項を探すのは難しい。

[浦田委員長]

それでは、頂いた意見を元に編集作業を進めることにする。

[事務局]

今後、頂いたご意見に基づき、翻刻者、専門である岩淵委員、中澤委員に相談しながら進めていく。今年度は翻刻作業を進め、来年度に刊行する予定で予算要求を行う。進捗状況については次回の市史編さん委員会で報告する。

今後の編さん委員会の予定としては、来年度以後に刊行する『佐倉市史料叢書』について検討を行い提示させて頂く。

事務局としては、編さん室に収蔵されている近世、近代文書の整理を計画し実施していく。また、市内市外に、佐倉の関係史料がまだあるので、そういったものの調査を行い、今後の編さん事業において活用すべく整理等を実施して参りたいと考えており、その過程で委員のご意見を賜りたい。

[五十嵐委員]

市史編さん委員であった青柳嘉忠先生、檀谷健蔵先生が手がけた『佐倉文庫』は第三集まで出たかと記憶しており、先が出ると思っていた。今後、どのようなものを翻刻していくかということについては、相当の準備、検討が必要になってくると思う。この先に着手していくものの検討を早めに行う必要があると思う。

青柳先生がお元気な頃、「多少、不完全であっても活字にしておく、みんながこれを覚えていてくれるんだよ。だから活字にしなければダメなんだ。」と口癖のようにおっしゃっていた。前回の会議で提示して頂いたものもあったが、具体的な検討を早めにやって頂けるとありがたいと思う。

[近森委員]

今後、どういう計画の中で、なぜ『古今佐倉真佐子』が最初なのか。今後はどうするのか、ということをも最初に議論するのが普通だと思う。

[浦田委員長]

次回、どういった史料があって、どのような流れでやっていくのかを検討したいと思う。研究の熟度もあるだろうし、研究の熟度の高いものから出していくということになると思うので、その準備を進めてほしい。

[近森委員]

あるいは、今回が文庫の「第四集」だという言い方もあると思う。

[五十嵐委員]

浅井忠の史料を出したのは、社会教育課であったか？編さん室で手がけているもの以外

に、社会教育課の方で出しているものもあるのではないか。

[事務局]

浅井忠の『筑波日記』は、県立美術館で刊行したもの。

[中澤委員]

今回の『古今佐倉真砂子』については、たまたま菅原先生の作業とのタイミングが一致したが、継続するためには、態勢を整えていく必要がある。今回は異例。今後、誰かの助けを乞うのか、翻刻まですべて事務局で行うのか、早めの検討が必要だと思う。

[岩淵委員]

翻刻の予算、人件費等、今回はレアケースであって、今後は予算化が必要となる。

[浦田委員長]

多くのご意見を頂きました。『佐倉市史料叢書 古今佐倉真佐子』の刊行に向けて進めさせていただきます。本日はありがとうございました。